

シネマ
横浜 **ジャック&バテ** 2020.11.14-11.27

01

ジュリアン・ジェステール
(リベラシオン)による
セレクション

mois de
la critique
映画 / 批評 月 間

映画批評月間
フランス映画の現在

Mois de la critique -
Nouveaux rendez-vous
du cinéma français

<http://jc3.jp/mdlc/>

02

オリヴィエ・ペール
(アルテ・フランス・シネマ)による
セレクション

フランス映画の“現在”がみえる珠玉の21本。

「映画批評月間 フランス映画の現在」上映スケジュール

※やむをえない事情により作品及び上映時間の変更される場合がございます。 ※上映作品はすべて、DCPまたはブルーレイでの上映となります。

	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
11.14 (土)	ワイルド・ボーイズ 13:00 (110分)		ジャン・ドゥーシェ、 ある映画批評家の肖像 15:00 (85分)		※上映前、トーク有 (坂本安美)				
11.15 (日)	今晚おひま? 13:00 (78分) ※1		ソロ 15:00 (89分)		ティップ・トップ ふたりは最高 17:00 (107分) ※2		※1 上映前、オリヴィエ・ペールによる解説映像上映 ※2 上映前、セルジュ・ポゾンによるトーク映像上映		
11.16 (月)	マイ・レボリューション 13:00 (88分)		20年後の私も美しい 15:00 (95分)		宝島 17:00 (97分)				
11.17 (火)	海辺の恋 13:00 (73分)	オー・パン・クベ 14:30 (71分)		地上の輝き 16:00 (102分)					
11.18 (水)	ポール・サンチェスが 戻ってきた! 13:00 (101分)		僕らプロヴァンシアル 15:00 (137分)		マイ・レボリューション 17:30 (88分)				
11.19 (木)	20年後の私も美しい 13:00 (95分)		宝島 15:00 (97分)		ワイルド・ボーイズ 17:00 (110分)				
11.20 (金)			アリスと市長 15:00 (105分)		見えない太陽 17:00 (102分)		※上映前、オリヴィエ・ペールによる解説映像上映		
11.21 (土)			シノニムズ 15:00 (123分)		君は愛にふさわしい 17:30 (107分)				
11.22 (日)			リベルテ 15:00 (138分)		マダム・ハイド 17:30 (96分)				
11.23 (月)			アリスと市長 15:00 (105分)		見えない太陽 17:00 (102分)				
11.24 (火)	入場料金 [全席指定・定員入替制] 1回券:1500円 大学生:1200円 シニア:1100円 高校生以下:1000円 ジャック&ベティ会員:1000円 アンスティチュフランセ会員:1000円 リピーター割引(窓口限定/半券提示):1000円 開場時間:上映の10分前				赤いトキ 17:00 (87分)		カプールのツバメ 19:00 (82分)		
11.25 (水)					シノニムズ 17:00 (123分)		ジャン・ドゥーシェ、 ある映画批評家の肖像 19:30 (85分)		
11.26 (木)	チケットは、劇場HP(オンライン)、窓口共に、 ご鑑賞日の3日前から指定席で発売します。				君は愛にふさわしい 17:00 (107分)		リベルテ 19:00 (138分)		
11.27 (金)					ティップ・トップ ふたりは最高 17:00 (107分)		マダム・ハイド 19:00 (96分)		※上映後、クレモン・ ロジェによるトーク



シネマ 横浜 ジャック&ベティ

<https://www.jackandbetty.net/>
オンラインチケット販売あり

〒231-0056

横浜市中区若葉町3-51

TEL. 045-243-9800

主催: 横浜シネマ・ジャック&ベティ

共催: 一般社団法人コミュニティシネマセンター

企画協力: アンスティチュ・フランセ日本

助成: アンスティチュ・フランセパリ本部

フィルム提供及び協力:

パシフェール、カルロッタ・フィルム、エチェ・フィルム、インディセールズ

MK2、フィルム・プティック、キノフィルムズ、ロプスター・フィルム、

モッキー・デリシャス・プロダクツ、ル・プティ・ビュロー、SBS、東北新社

特別協力: 笹川日仏財団、Bart.lab、ヴェッター庭園



01 作品選定 Sélection des films par

ジュリアン・ジェステール Julien Gester

「リベラシオン」文化部チーフ、映画批評家

1986年ストラスブール生まれ。2012年よりフランス日刊紙「リベラシオン」のジャーナリスト、映画批評家として活動、それ以前は人気カルチャー雑誌「レ・ザンロキュブティール」に執筆、ラグジュアリーファッション誌『Mastermind』の編集長、『Grazia』フランス版創刊にも携わる。そのほか、ボンビドー・センターやシネマテーク・フランセーズでの講演、セルジュ・ダネーらによって創刊された映画雑誌『トラフィック』、『ヴォーグ』、『Acne Paper』、『Vanity Fair』など雑誌への寄稿も定期的に行う。フランス、世界各地の映画祭、シネクラブなどで日本映画、アメリカのコメディを積極的に紹介している。作曲家でもあり、映画音楽も手がける。

現在の若手監督たちが撮ったこれらの作品は、まさに高い志や独特な想像力によって、使い古されたコードや時代が強いる陰鬱な運命にはっきりと抵抗を示していると言えるだろう。

アンスティチュ・フランセ日本が、フランスの映画批評家、専門家、プログラマーらと協力し、最新のフランス映画を選りすぐって紹介する「映画批評月間～フランス映画の現在」。

Vol.01は、「リベラシオン」のジュリアン・ジェステール、

Vol.02は、アルテ・フランス・シネマのオリヴィエ・ペールが選定を担当。批評家が選んだ新旧のフランス映画、珠玉の21本をお楽しみください。

映画批評月間
フランス映画の現在

Mois de la critique -
Nouveaux rendez-vous
du cinéma français

インスピレーションに溢れた映画作家たちに耳を傾け、斬新な作品に寄り添い続けたいという私たちの意思は尽きることはありません。

02 作品選定 Sélection des films par

オリヴィエ・ペール Olivier Père

アルテ・フランス・シネマ ディレクター

ソルボンヌ大学で文学を学んだ後、シネマテーク・フランセーズで、上映プログラムに携わる。その一方で「レ・ザンロキュブティール」などで映画批評を執筆。2004～2009年カンヌ国際映画祭監督週間ディレクター、2008～2012年ロカルノ国際映画祭アーティストック・ディレクターを務めた。この間、富田克也の『サウダーチ』、三宅唱の『Playback』などがコンペティションに選ばれ、2011年には青山真治（『東京公園』）が金豹賞（グランプリ）審査員特別賞を受賞。2012年以降はアルテ・フランス・シネマのディレクターを務め、フランスをはじめ、世界中の映画作家の作品を支援し、共同製作している。またアルテのサイトで定期的に映画評を執筆し続けている。

Guests

クレモン・ロジェ（映画批評・プログラミング）

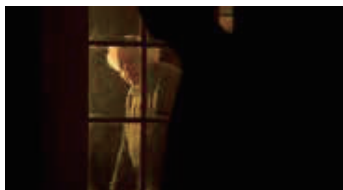
坂本安美（アンスティチュ・フランセ日本 映画プログラム主任）

批評家のドキュメンタリー

ジャン・ドゥーシェ、ある映画批評家の肖像

Jean Douchet, l'enfant agité

2017年/85分/カラー/デジタル/フランス語
監督：ファビアン・アージュジュ、ギヨーム・ナミュール、ヴァンサン・アセール



2019年に90歳で亡くなるまで、その類まれなる知性、教養、ユーモアによって、映画作家や映画ファンたちに影響を与えてきた映画批評家ジャン・ドゥーシェ。3人の若い監督たちがドゥーシェを追った貴重なドキュメンタリー。

ジャンは映画の意味を自覚めさせる術を知っている。映画の送ってくる手紙を読み解くように。そして美への思い、配慮する気持ちがジャンをここシネマテークや、他の多くの映画館へと足を運ばせたのです。
——アルノー・デブレシャン

ポール・サンチェスが戻ってきた!

Paul Sanchez est revenu!

2018年/101分/カラー/デジタル/フランス語
監督：パトリア・マズィ 出演：ローラン・ラフィット、ジタ・オンロ、フィリップ・ジラール



10年前に失踪した凶悪犯罪者・ポール・サンチェスが、プロヴァンス地方レ・ザルクで目撃されたという噂が広まる。警察署では誰もそのことを本気にしなかったが、若い警官のマリオンは違った。

このような場所を映画に撮るのはパトリア・マズィにおいて他にいないだろう。丘陵、レ・ザルク、谷、国道、まるでラオール・ウォルシュの映画に見られるような広大な世界。ある人物の狂気が拡散していくとともに物語が展開し、やがてその狂気は集団の中へと波及していく。
——J. ジュステール

20年後の私も美しい

La Belle et la Belle

2018年/95分/カラー/デジタル/フランス語
監督：ソフィー・フィリエール 出演：サンドリーヌ・キペルラン、アガット・ボニゼール、メルヴィル・ポボー



大学生のマルゴーは、恋愛についても、将来についても、成り行きに身を任せて日々を生きている。ある日、40代半ばの女性マルゴーと知り合う。やがてふたりは、自分たちがひとつの人生の異なる年齢を生きている同じ人間であることを知る…。監督の娘で、透明感のある美しさが魅力のアガット・ボニゼールとコメディエンスとしての才能抜群のサンドリーヌ・キペルランがひとつの女性の20代と40代を軽やかに繊細に演じている。

01

ジュリアン・ジュステール (リベラシオン)によるセレクション

02

オリヴィエ・ペール (アルテ・フランス・シネマ)によるセレクション

2019年ベストアルテ共同製作作品

第72回カンヌ国際映画祭監督週間出品

アリスと市長 Alice et le Maire

フランス/2019年/105分/カラー/デジタル/フランス語
監督：ニコラ・パリジエ 出演：ファブリス・ルキーニ、アナイス・ドゥモスティエ、ノラ・ハムザウほか



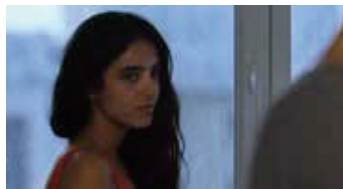
リヨンの市長ポールは、アイデアが一切浮かばなくなり、若き哲学者アリスに助けを求めることに。『木と市長とメデアテーク』で高校教師を演じたルキーニが26年後、まさにロメールのコメディで、老いとともに人生を見つめ直す市長を演じる。洗剤とした魅力で人気の若手女優ドゥモスティエがアリスを演じている。

第72回カンヌ国際映画祭批評家週間出品

君は愛にふさわしい

Tu mérites d'un amour

フランス/2019年/107分/カラー/デジタル/フランス語
監督：アフシア・エルジ 出演：アフシア・エルジ、ジェレミ・ラウルト、ジャニス・ブジアニほか



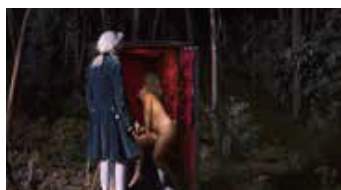
恋人レミの裏切りを知り、リラは苦しむ。ポリアに旅立ったレミから、二人の関係はまだ終わっていないと告げられ、さらに苦しむリラは、友人たちとの会話、新たな出会いの中でもがき、愛の行方を求めて彷徨う。アプテラティフ・ケシユアラン・ギロディらの作品に出演している女優エルジが初監督、主演。カンヌ国際映画祭批評家週間上で上映され、「宝石のように美しいラブストーリー」と絶賛された。

2019年カンヌ国際映画祭「ある視点」部門受賞作品

リベルテ

Liberté

フランス=ポルトガル=スペイン=ドイツ/2019年/138分/カラー/デジタル/フランス語/R16+
監督：アルベルト・セラ 出演：ヘルムート・バーガー、マルク・スジニ、イリアーナ・ザベート、リュイス・セラほか



『ルイ14世の死』の鬼才アルベルト・セラがフランス革命前夜の18世紀の選貴族たちへの性、欲望のありか、サド的世界に迫る。ルイ16世のビュリタンの厳格な宮廷から追放された自由主義者たち(リベルタン)は、伝説的ドイツ人公爵フルジャンの支援を求めて国境を越える。

69回ベルリン国際映画祭金熊賞受賞

シノニムズ

Synonymes

フランス=イスラエル=ドイツ/2018年/123分/カラー/デジタル/フランス語/R15+
監督：ナダヴ・ラビド 出演：トム・メルシエール、カンタン・ドルメル、ルイーズ・シュヴォイヨット



『シノニムズ』は、パリの空っぽのアパルトメントで凍えそうになった裸体と共に、象徴的な死とある誕生によって幕を開ける。物語は、祖国イスラエルからパリへと亡命し、文化、言語、国、すべてを白紙に戻し、未知の場所でゼロから生きることを選んだラビド監督自身の人生に着想を得ており、主役のヨアブは監督の分身であるだろう。本作はラビドがこれまで続けてきた試みのひとつの到達点でもある。それは通常なら詩的なものからほど遠い憎しみや嫌悪の言葉や映像を結びつけ、それらの衝突の中から、そして視線の中から美を導き出すという試みである。
——オリヴィエ・ペール

マイ・レボリューション

Tout ce qu'il me reste de la révolution

2018年/88分/カラー/デジタル/フランス語

監督: ジュディット・ドヴィス 出演: マリック・ジディ、
クレア・ドゥーマス、メラニー・ペステル



共産主義の両親に育てられた30代のアンジェルにとって、現代社会は憤りを感じることはばかり。活動家だった父は歳をとり、母は政治思想を捨て田舎へ移住。全てに行き詰ったアンジェルは、久々に母に会いに行くことにする。アンジェルの母親役をミレーユ・ペリエ（『ボーイ・ミーツ・ガール』『ギターはもう聞こえない』）が演じている。

ワイルド・ボーイズ

Les Garçons sauvages

2018年/110分/モノクロ&カラー/デジタル/フランス語
監督: ベルトラン・マンディコ 出演: ヴィマラ・ボンズ、
ポリヌ・ロリラル、ディアンヌ・ルクセル、アナエル・
スノーク、マチルド・ワルニエ、サム・ルーウィック



20世紀初頭。良家出身の5人の少年が卑劣な罪を犯してしまう。罪を償うため謎の船長に預けられた少年たちは、過酷な航海の旅へと連行される。ある無人島に座礁すると、そこには快楽を与えてくれる幻想的な植物が生い茂っている。欲望に溺れる少年たちの身体は次第に変異していく。デジタルトリックに頼らない、驚くべき造形の美しさも見所のひとつ。

僕らプロヴァンシアル

Mes provinciales

2018年/137分/カラー/デジタル/フランス語

監督: ジャン・ポール・シヴェラック 出演: オンドラニック・
マネ、ゴンザグ・ヴァン・ベルヴェセレス、コランタン・フィラ



エティエンヌは大学で映画を学ぶため、パリに上京する。そこで映画への情熱を同じくするマティアスとジャン＝ノエルと出会う。しかし、時がたつにつれ、彼らの抱いていた幻想が徐々に変質していく。

シヴェラックは、プレゾン、ロメル、ユスターシュと同じような方法で、アナクロニズムを引き受けている。たとえば現在そのものを言葉の中に詰め込み、それを古くからの思想によってねじ曲げ、時を越えたプロットの中で純化させるように。——J. ジュステール

宝島

L'île au trésor

2018年/97分/カラー/デジタル/フランス語

監督: キヨーム・ブラック



パリの北西にあるレジャー・アイランドでのひと夏。ある者にとっては冒険、誘惑、ちょっとした危険を冒す場所。他の者たちにとっては避難、逃避の場所となっている。世界の喧騒とどこかで響き合いながら、この場所には有料の海水浴場もあれば、人目につかない片隅、子どもたちが探求する王国もある。

イル・ド・フランスのセルジー＝ポントワーズにあるこのレジャー・アイランドは私の子ども時代の一部を成しており、今日でもなおとても鮮明な記憶と結びついています。——G. ブラック

映画批評月間

フランス映画の現在

Mois de la critique -
Nouveaux rendez-vous
du cinéma français

特集

セルジュ・ボゾン

見えない太陽

L'Adieu à la nuit

フランス=ドイツ/2019年/102分/カラー/
デジタル/フランス語

監督: アンドレ・テシネ 出演: カトリーヌ・ドヌーフ、
ケイシー・モッチ、クライン、ウーヤラ・アムラ ほか



地方で農場を営むミュリエルは、孫息子のアレックスがイスラム教に入信し、その教団がシリアのテロリストたちとつながりがあり、アレックス自身もシリアに向かおうとしていることを知り、彼を引きとめようとする。ドヌーフがもっとも信頼を置く名匠アンドレ・テシネによって、大女優の魅力が最大限に引き出されている。

2019年カンヌ国際映画祭ある視点部門コンペティション出品

カブールのツバメ

Les Hirondelles de Kaboul

フランス=ルクセンブルク=スイス/

2019年/82分/カラー/フランス語/アニメーション
監督・脚本: ザブール・フライトマン&エリア・ゴベ・メヴェレック



1998年夏、アフガニスタンのカブールはタリバン勢力の支配下に。ズナイラとモーゼンのカップルは、暴力と悲惨な現実の中でも希望を持ち続けていた。歴史の中で翻弄される夫婦や恋人たちの日常のささやかなやり取り、感情が繊細に描かれ、心を打つ傑作アニメーション。スワン・アルローら、フランスで人気上昇中の俳優たちが声で出演している。

ティップ・トップ ふたりは最高

Tip Top

フランス=ルクセンブルク/2014年/107分/カラー/
デジタル/フランス語

出演: イザベル・ユベール、サンドリーヌ・ケルラン、
フランソワ・ダミアン、キャロル・ロシェほか



フランス北部でドラッグの密売に関わっていたアルジェリア系の情報屋が殺された。警察署内部を探るため、ふたりの女性監察官エスターとサリが派遣された。ひとりには殴りこみをかけ、もうひとりには覗き見る…そう、ふたりは最高のコンビ!

ボゾンはかつてゴダールが取った方法を応用してみせる。犯罪映画を口実に、まったく別のものを語ることは本作では何が語られているのか。おそらく傑出した前作のタイトルの中にその答はあるだろう、つまり『フランス』である。——O. ベール

マダム・ハイド Madame Hyde

フランス/2018年/96分/カラー/デジタル/フランス語

出演: イザベル・ユベール、ロマン・デュリス、
ジョゼ・ガルシア



パリ郊外の高校に勤める内気な物理学の女性教師ジキルは生徒たちに見下されている。ある日、彼女は、実験中に失神し、神秘的で危険な力を感じるようになる。スティーヴンソンの代表作『ジキル博士とハイド氏』を19世紀後半のブルジョワ社会ではなく現代のパリ郊外を舞台に、男性ではなく女性を主人公に自由に脚色されたボゾンの最新作。

セルジュ・ボゾン Serge Bozon

1988年初長編作『友情』を発表。次作のミュージカルコメディ『モッズ』(2003)でベルフォール国際映画祭レオ・シェア賞、第一次世界大戦を描いたシルヴィエ・テストュー主演の『フランス』(2007)でジャン・ヴィゴ賞受賞。その後、『ティップ・トップ ふたりは最高』を発表(カンヌ国際映画祭監督週間)。イザベル・ユベール主演の最新作『マダム・ハイド』は、第70回ロカルノ国際映画祭インターナショナル・コンペティション部門で主演女優賞受賞。映画批評家として『カイエ・デュ・シネマ』、『So Film』などに寄稿。俳優としても『倦怠』(S. カーン)、『青の寝室』(M. アマルリック)などに出演している。

ギィ・ジル、見出された映画作家



ユスターシュやガレルとさほど遠くなく、彼らの従兄弟のような存在でありながら、人目にあまり触れることなく映画を撮り続けていたギィ・ジル。忘却に抗う力を秘めていた彼の映画がようやく発見、再発見され、フランスをはじめ世界中で徐々に評価が高まっている。
——J・ジュステール

海辺の恋

L'Amour à la mer

1963年/73分/カラー&モノクロ/デジタル/フランス語
出演：ジュヌヴィエーヴ・テニエ、ダニエル・ムスマン、ギィ・ジル、シモーヌ・パリ、ジャン＝ピエール・レオ



ジュヌヴィエーヴは水兵のダニエルと海辺の街ドーヴィルで落ち合い、愛し合う。ヴァカンスが終わり、ダニエルは prest の駐屯地に、ジュヌヴィエーヴはパリに戻り、再会することを待ち望みながら、それぞれの生活を送る。ダニエル同様にアルジェリア戦争から戻ってきた水兵ギィの感情がふたりのそれと混ざり合っていく。ギィ・ジル自身がギィ役に出演している。

今晚おひま?

Les Dragueurs

フランス/1959年/78分/モノクロ/デジタル/フランス語
出演：ジャック・シャリエ、シャルル・アズナブール、ダニー・ロパン、アヌーク・エーメほか



土曜日の夕暮、20歳のブレイボーイのフレディとまじめな銀行員ジョゼフは女の子を「ひっかけに」街に繰り出す。アンバッド、サン＝ジェルマン＝デ＝プレ、シャンゼリゼ通り、モンマルトル・様々な女性たちと出会い、彼女たちの人生を垣間見る。29歳のジャン・ピエール・モッキーが自伝的な要素を交えて撮った処女作。日本で公開された唯一のモッキー作品でもある。

ジャン＝ピエール・モッキー

モッキーの映画には、ユーモアとファンタジーがあるとともにメランコリー、暴力、そして悲劇も存在しています。

ジャン＝ピエール・モッキー Jean-Pierre Mocky

1933年ニース生まれ。67本の長編作品を監督。フランス映画のどこにも分類できない、ユニークな映画作家。フランス国立高等演劇学校入学後、若手俳優として頭角を現す。ルキノ・ヴィスコンティ監督『夏の嵐』で助監督を務めた後、1959年処女長編作『今晚おひま?』を発表。「ヌーヴェルヴァーグの従弟」のような作品と評されるが、風刺的でメランコリック、そして類をみない反体制的な作風で他とは一線を画し、メインストリームから外れた場所、自由に映画を撮り続ける。ラブ・コメディから風刺的コメディ、犯罪映画や軍隊もの、政治的作品から幻想的な作品まで、ひとつのジャンルにおさまることなく、慣例化された制度、価値に反旗を翻し、アナキーな世界観や荒々しいまでのユーモアを刻印してきた。モッキーの魅力は多くのスター俳優たち、フェルナンデル、ミシェル・シモン、カトリーヌ・ドヌーヴ、ジャンヌ・モローを引きつけ、名優ブルヴィル、ミシェル・セローとは特に多くの作品でタッグを組んでいる。2019年8月8日死去。

ギィ・ジル Guy Gilles

アルジェリアの首都アルジェ生まれ。子どもの頃より映画ファンで、20歳で処女短編『消された太陽』を監督。アルジェリア戦争下の1960年、パリへ移住。ピエール・ブロンベルジェの援助により短編を監督、その中の『Au biseau des baisers』を気に入ったジャン＝ピエール・メルヴィルから援助を受けて初長編作品『海辺の恋』を3年がかりで製作、ロカルノ映画祭で批評家賞を受賞。長編第2作『オー・パン・クペ』は、M.デュラスから賛辞の言葉が寄せられた。3作目『地上の輝き』はイェール映画祭グランプリ、4作目『反復される不在』(72)はジャン・ヴィゴ賞を受賞。

オー・パン・クペ

Au pan coupé

1967年/71分/カラー&モノクロ/デジタル/フランス語
出演：パトリック・ジュアネ、マーシャ・メルル、ベルナルド・ヴェレ



ジャンヌはかつての恋人ジャンを思い返し、今もその恋を生きている。ジャンは15歳で少年院に入り、既定秩序に反抗し、ブルジョワ的な世界もビート族たちの世界も拒否して死んでいった。彼の死を知らないジャンヌにはジャンが亡霊のように寄り添っている。

この作品での愛は顔によって想起させられ一度も繰り返し見せられる女性の顔、視線、—それにはただただ感嘆させられる。そう、こうした試みはこれまで一度も映画でなされたことがなかっただろう。
——マルグリット・デュラス

地上の輝き

Le Clair de terre

1969年/102分/カラー&モノクロ/デジタル/フランス語
出演：パトリック・ジュアネ、エドウィジュ・ファイエル、アニー・ジラルド、ミシュリーヌ・ブレール



チュニジア生まれで、母の死まで幼年期をその地で過ごしたピエール、いまはパリのマレ地区に父親と住んでいる。突如、パリを離れる必要を感じたピエールはチュニジアの首都チュニスに向かう。そこでかつての教師に尋かれ、自分の過去の足跡を辿る。

ソロ Solo

フランス/1970年/89分/カラー/デジタル/フランス語
出演：ジャン＝ピエール・モッキー、アンヌ・ドゥルーズ、デニス・ル・ギヨ ほか



ヴァイオリン奏者のヴァンサン・キャブルは宝石泥棒でもある。弟のヴィルジルはアナキストのグループに属し、殺人にも手を染めていた。ヴァンサンはこれ以上殺戮が繰り返されないよう、警察に先回りしてヴィルジルを追いかける。

70年代、モッキーはB級犯罪映画を自ら主演し、連続して撮っている。アクションに次ぐアクション、そして演出のアイデア満載の本作は、68年五月革命直後についてのモッキー自身の考察から出発している。シニクなアンチヒーローを演じるモッキー、ジョルジュ・ムスタキのテーマ曲によって怒りを帯びたロマンチスムに包まれたフィルムノワール。——O.ペール

赤いトキ

L'ibis rouge

フランス/1975年/87分/カラー/デジタル/フランス語
出演：ミシェル・セロー、ミシェル・シモン、エヴリーヌ・パイル ほか



孤独な会社員ジェレミーは赤いマフラーで女性たちを絞殺してきた。同じ界隈に住む賭博好きのレーモンは、借金を返済するために愛する妻のエヴリーヌに宝石を売るよう頼む。そんなふたりが出会い、ある計画が立てられる…。

フレドリック・ブラウンの推理小説『3、1、2とノックせよ』から着想を得た本作は、ファンタスティックかつゴエティックにフランス社会を描いたモッキーの代表作のひとつ。本作が遺作となった偉大な俳優ミシェル・シモンへのオマージュでもあり、サン＝マルタン運河沿いで撮られた『素晴らしき放浪者』や『アタラント号』の記憶が蘇ってくる。——O.ペール